

高等学校における 特別支援学校のセンター的機能の活用の充実にむけて

— 生徒理解を進めるためのシートを活用した連携を通して —

萩原 琴乃¹

インクルーシブ教育の推進に向けて、高等学校（以下、高校という）における支援教育の充実に図るための手立てとして、特別支援学校がセンター的機能を果たすことが求められている。本研究では、特別支援学校から高校への働きかけとして、生徒の情報を共有するための「生徒理解シート」を作成し、「生徒理解シート」を活用した高校への巡回相談を実践し、シートの有効性について検証した。

はじめに

平成 19 年に策定された本県の教育の総合的な指針である「かながわ教育ビジョン」では、基本方針の一つとしてインクルーシブ教育の推進を掲げ、全ての学校でインクルーシブ教育を進めていくことが示された。平成 27 年の「県立高校改革基本計画」では、「高校には、発達障害等困難のある生徒が在籍している可能性がある」とされており、その他にも支援を必要とする生徒が多く学んでいることや、「教職員には、障害の有無にかかわらず、生徒への理解を深め、支援を必要とする生徒の状況を見取り、適切な支援ができる知識・技能を身に付けることが求められている」ことが述べられている。加えて平成 30 年の「県立高校改革実施計画(Ⅱ期)」では、インクルーシブ教育に関する学校支援の充実にして、高校が特別支援学校と連携した支援に取り組むとしており、特別支援学校はセンター的機能を果たすことが求められている。

特別支援学校のセンター的機能の具体的内容は、平成 17 年中央教育審議会「特別支援教育を推進するための制度の在り方について(答申)」によると、①小・中学校等の教員への支援機能②特別支援教育等に関する相談・情報提供機能③障害のある幼児児童生徒への指導・支援機能④福祉、医療、労働等の関係機関等との連絡・調整機能⑤小・中学校等の教員に対する研修協力機能⑥障害のある幼児児童生徒への施設設備等の提供機能と提示されている。特別支援学校は、地域における特別支援教育の中心的な役割を担い、支援を必要としている児童・生徒を支えている学校や教員等に対して必要な助言又は援助を行っている。

神奈川県立特別支援学校のセンター的機能の活用状況は、平成 30 年度の機関別教育相談件数による

と、高校は 240 件であり、全体に占める割合は約 4 %であった(令和元年度特別支援学校地域センター推進協議会第 1 回全体協議会)。また、平成 31 年 3 月「神奈川県の特別支援教育のあり方に関する検討会の中間まとめ」においても、「高等学校においては、小・中学校に比べて特別支援学校の教育相談の活用件数が少なく、主な相談内容は個々のケースへの対応であり、センター的機能を活用した校内の支援体制の構築が望まれる」と示されている。

神奈川県の県立特別支援学校でセンター的機能の中心を担う教育相談コーディネーター(以下、特COという)と自立活動教諭(専門職)を中心とした特別支援学校地域センター推進協議会では、平成 29、30 年度に「切れ目ない支援体制の構築に向けて」というテーマで高校との連携について協議が行われた。その中で、対象生徒の課題として挙げられる項目が、高校では進級、単位や出席時数等である一方、特別支援学校では社会性、対人関係や対象生徒の特性に応じた環境設定等であり、違いがあること、高校内の教職員間で支援への意識に違いがあること、高校ごとに校内支援体制が様々であること、センター的機能について周知されていないといった課題が挙げられた。

そこで、高校を対象としたコンサルテーションを中心とする巡回相談を充実させることが、これらの課題解決につながるのではないかと考え、取り組むこととした。なお、本研究における巡回相談とは、特COが高校へ行き、対象生徒の授業観察及び高校の教職員とケース会議を行うことである。

研究の目的

特別支援学校のセンター的機能が、高校で活用されるために、巡回相談を充実させる方策を探ることで、支援が必要な生徒に対する高校での支援体制の構築に資する。

1 神奈川県立茅ヶ崎養護学校
研究分野(一人ひとりのニーズに応じた教育研究
支援教育)

研究の内容

1 調査 1

(1) 目的

A高校における支援の現状とセンター的機能の活用状況を把握する。

(2) 方法等

令和元年7月～8月にA高校の教職員 65 名を対象に選択式と自由記述による質問紙調査を行い、55 名の回答を得た。

(3) 結果と考察

ア A高校での支援の現状

「支援が必要だと思われる生徒が在籍しているか」の質問に75%の教職員が「いる」と回答し、支援が必要な生徒の課題は多岐に渡っていた(第1表)。また「いる」と答えた教職員の88%が実際に支援をしており、日常的に行っている支援については、「スクールカウンセラー(以下、SCという)やスクールソーシャルワーカー(以下、SSWという)と連携」が最も多かった。次いで「誰かと相談してから支援をしている」と回答しており、中には「学年で協力している」との回答があった。一方で「担当に任せている」「一人で支援している」「具体的な支援はしていない」といった回答もあり、教職員の支援に差が見られた。学習面での具体的な支援内容については、「机間指導を多く行う」「全体指示後に個別指導」「提出物を出すように声かけをする」等の回答があった。

第1表 支援が必要だと思われる項目

どのような面で支援が必要だと思うか(複数回答可 n=41)。		
行動	①落ち着きがない、授業中の立ち歩き、急にキレる	37 90.2%
	②非行傾向、喫煙、盗癖	19 46.3%
	③パニック、自傷行為	17 41.5%
	④その他 自殺企図、法律に抵触する行為	
学習	①学力の積み上げができない、学力不振	38 92.7%
	②提出物がでない、支援をしても出さない	29 70.7%
	③運動が苦手、動きがぎこちない	11 26.8%
	④その他 学習障害	
生活	①遅刻欠席が多い(不登校は除く)	35 85.4%
	②無気力、生活リズムの乱れ、忘れ物が多い	30 73.2%
	③家庭環境に課題がある、経済的な厳しさ	28 68.3%
	④その他 ルールが守れない	
対人関係	①友達が少ない、一人でいることが多い	22 53.7%
	②会話が成り立たない、一方的な会話、ヘルプがだせない	19 46.3%
	③その他 集団での指示を聞き取ることができない	
集産校	①長期欠席	18 43.9%
	②休みがち	17 41.5%

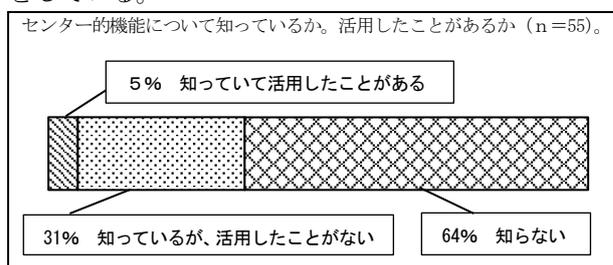
調査1の結果より、A高校では支援の必要な生徒について気付きがあるものの、教職員によって支援に差があることがわかった。教職員の気付きから教職員間での生徒理解や支援の方針の共有につなげるために、特別支援学校のセンター的機能が一助となると考えた。

イ センター的機能の活用

「特別支援学校のセンター的機能について知っているか」の質問に「知っている」と答えた教職員は36%であり、そのうち実際に活用した経験のある教職員は全体の5%であった(第1図)。

「活用したことがある」教職員からは、「生徒の理解が深まった」「校内で支援に関わる教職員間での情報共

有ができた」等が良かった点として挙げられた。課題として、日程調整の難しさや継続した活用に至らなかったことが挙げられたが、活用したことがある全教職員が、「センター的機能をまた活用したい」という回答をしている。



第1図 A高校におけるセンター的機能の認知度

また、「センター的機能を知っているが活用したことがない」教職員からは、活用したことがない理由として、「相談してよい内容がわからない」「どの機関との連携が有効なのかわからない」との回答が多く、自由記述の中には「敷居が高いが、もっと活用したい」という意見もあった。「活用してみたいセンター的機能は何か」の複数回答できる選択式の質問項目に対し、回答者の約半数が「特COが高校に行き相談する(巡回相談)」「高校の生徒や保護者が特別支援学校に行き、相談をする(来校相談)」「高校の教職員や保護者からの電話による相談(電話相談)」「医療、福祉、進路等の情報提供」と答え、相談のニーズがあることが明らかとなった。しかしながら、センター的機能の認知度の低さや、知っていても活用に至っていない現状から、高校におけるセンター的機能の活用を推進していくためには、特別支援学校からの具体的な働きかけが必要であると考えた。

2 研究の仮説

巡回相談を行うにあたり、高校と特別支援学校にとって、生徒の情報を共有するための共通のツールである生徒理解シート(以下、シートという)の活用が有効である。

3 研究の概要

(1) シートの作成

調査1を基に、支援が必要だと思われる項目や特別支援学校が高校との連携において課題であると感じている点を整理した。その上で巡回相談をするにあたり必要な生徒情報を精選し、高校と特別支援学校が生徒の情報を共有できるようなシートを作成した。

(2) A高校での実践

ア A高校の概要

A高校は全日制普通科で生徒数は約900名、教職員は65名である。教育相談コーディネーター(以下、高COという)は3名(2年2名、3年1名)おり、担任と兼務している。またSCとSSWの拠点校であり、活

用が多い。

イ 期間

令和元年9月～10月

ウ 実践の内容

A高校の生徒3名について、シートを活用し、B特別支援学校の特C O 1名と共に巡回相談を実施した。対象生徒については、担任や教科担当者は支援が必要であると感じているものの、これまで校内で情報共有や支援策の検討は行われていない。

(3) B特別支援学校の巡回相談の現状

小・中学校の特別支援学級との連携が多く、他にも幼稚園・保育所や児童クラブ(学童保育)から巡回相談の依頼がある。巡回相談に行く主な地域の中に、A高校を含め、高校は5校(6課程)があり、昨年度の高校への巡回相談は1校(2課程)2件であった。平成29年度に一度、A高校から相談依頼があったが、継続した連携には至らなかった経緯がある。

特C Oは2名おり、専任である。

(4) 調査2

ア 目的

シートを活用した巡回相談を通して、シートの有効性やセンター的機能の活用に向けての課題を探る。

イ 期間

令和元年10月～11月

ウ 方法等

ケース会議に参加した教職員8名に選択式と自由記述式の質問紙調査を行った。またシートを記入した担任2名、高C O 1名、特C O 1名の計4名に聞き取り調査を行った。

4 生徒理解シートの作成

高校と特別支援学校が、同じシート(A4裏表)に1名の生徒の情報を記入する(第2図)。シートは、①事前情報②情報の聞き取り③巡回相談の実施④ケース会議の実施⑤校内の活用の5つの内容で構成した。①⑤は高校、②～④は特別支援学校が記入する。

(1) シートの内容

ア ①事前情報

高校の担任が、生徒の実態についてチェックリストと自由記述で記入をする(第2表)。

第2表 高校が記入する内容

・所属(学年、部活動、委員会)
・要支援だと思われる項目
・相談したいこと
・気になる項目(チェック式)
・本人のよいところ、得意なこと、興味関心等
・これまで行った支援(効果があったこと、なかったこと)

イ ②情報の聞き取り

特C Oが、高C Oもしくは担任から電話で基本情報を聞き取り、記入をする(第3表)。①事前情報と合わせて生徒像を予測し、必要に応じて高C Oや担任にさらなる情報収集を依頼する。

第3表 特別支援学校が聞き取る内容

・診断名の有無
・手帳の有無(療育手帳等)
・連携(SC、SSW、児童相談所、医療、その他)
・その他(家族関係、昨年度の様子、中学校からの引継ぎ等)

ウ ③巡回相談の実施

特C Oが、対象生徒の授業観察の様子を記入する。特C Oが見取ることができた項目がわかるようにチェックリストに印をつけ、担任から聞き取った情報や質問したい項目も記録としてわかるように記入する。また特C Oは、生徒の抱える困りの背景について、仮の見立てを記入する。

エ ④ケース会議の実施

ケース会議で決まった支援策を、特C Oがシートに

生徒理解シート

記入日: 年 月 日 記入者(秘)

生徒氏名	男・女	学年	1・2・3
部活動	委員会		
要支援だと思われる項目	<input type="checkbox"/> 学習 <input type="checkbox"/> 提出物 <input type="checkbox"/> 集団参加 <input type="checkbox"/> 出席状況 <input type="checkbox"/> 対人関係・社会性 <input type="checkbox"/> コミュニケーション		
相談したいこと			

気になる項目の□にチェックを入れてください。

学 習 面	<input type="checkbox"/> 全体指導での指示理解が難しい	特別支援学校記入欄
	<input type="checkbox"/> 授業内容をノートに書き写すことが難しい	
	<input type="checkbox"/> ノートの使用や書きに難しさを感じる	
	<input type="checkbox"/> 特定の科目の基礎な学力不足、成績に差がある	
	<input type="checkbox"/> 得意() 苦手()	
	<input type="checkbox"/> 全体的に学力が不十分である	
	<input type="checkbox"/> 授業中寝ていることが多い	
	<input type="checkbox"/> 課題等を期限通りに提出できない	
	<input type="checkbox"/> 忘れられた課題を忘れやすい	
	<input type="checkbox"/> 授業中に落ち書きが早く、集中することが難しい	
学 校 生 活 面	<input type="checkbox"/> 授業中に立ち歩くことがある	
	<input type="checkbox"/> みんなの前で発表することが難しい(黒板への発言含む)	
	<input type="checkbox"/> 時間割や教室等の急な変更に対応できない	
	<input type="checkbox"/> 気になったこと、1つのことごとくごたわり、他のことが考えられない	
	<input type="checkbox"/> 自覚が不十分である	
	<input type="checkbox"/> 机の上やロッカー等整理整頓が持ち物の整理をすることが難しい	
	<input type="checkbox"/> 教室の場所を変えられない、または校内で迷う	
	<input type="checkbox"/> 忘れなみを覚えることが難しい	
	<input type="checkbox"/> 手指の不器用さがある	
	<input type="checkbox"/> 姿勢が硬い(座り姿勢)	

取扱注意 (秘)

<input type="checkbox"/> 気持ちや考え、言葉でうまく伝えられない
<input type="checkbox"/> 場の雰囲気や簡単なルールを理解できない
<input type="checkbox"/> 人や物に一方的にあたることが多い
<input type="checkbox"/> 被害者意識が強い
<input type="checkbox"/> 友人が複数に少なく、一人であることが多い
<input type="checkbox"/> 友人関係を築きやすい
<input type="checkbox"/> 人の多い場所やざわついた空間にいられない
<input type="checkbox"/> 寝れやすい
<input type="checkbox"/> 遅刻・早退が多い
<input type="checkbox"/> 学校を休みがちである

本人のよいところ、得意なこと、興味関心など

これまで行った支援(効果があったこと、なかったこと)

特別支援学校記入欄

基本情報

診断	無・有()	療育手帳	不明・無・有()
連携	<input type="checkbox"/> SC <input type="checkbox"/> SSW <input type="checkbox"/> 児童相談所 <input type="checkbox"/> 医療 () <input type="checkbox"/> その他()		
その他			

②

見
た
て

支 援	<input type="checkbox"/> 個別対応(担任・学年主任・CO・養護教諭・部活動顧問・管理職・その他) <input type="checkbox"/> 保護者対応(担任・学年主任・CO・養護教諭・管理職・その他) <input type="checkbox"/> 連携(医療・SC・SSW・児相・その他)
--------	--

④

高等学校記入欄(今後の支援方針など)

⑤

第2図 生徒理解シート

記入する。

オ ⑤校内での活用

高COが、ケース会議で決まった支援策を見直す時期や誰とどのような場面で見直しを行うかを記入する。また、①～⑤全てを記入したシートを高校内で高COが中心となって、対象生徒に関わる教職員やSC、SSW等に回覧し、生徒の情報、見立て、支援策の共有をはかる。

(2) シートの工夫点

ア チェックリスト

生徒の実態について、チェック式にすることで記入する教職員の負担を軽減した。

チェックリストの質問項目は、平成24年文部科学省の「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査について」の質問項目及びインクルーシブ教育実践推進校である茅ヶ崎高校の「平成30年度インクルーシブ教育への取り組み」の「個別教育計画作成のためのチェックシート(1)〈生活全般〉」を参考に作成した。

また、質問項目は「学習面」13項目、「学校生活面」25項目とした(第4表)。

第4表 チェックリストの内容(一部抜粋)

気になる項目の□にチェックを入れてください。	
高等学校チェック項目	
学習面	<input checked="" type="checkbox"/> 全体指示での指示理解が難しい
	<input type="checkbox"/> 板書内容をノートに書き写すことが難しい
	<input type="checkbox"/> ノートの使用や書字に極端な乱雑さがある
	<input type="checkbox"/> 特定の科目の極端な学力不振、成績に差がある 得意() 苦手()

学校生活面	<input type="checkbox"/> 時間を守ることが難しい
	<input type="checkbox"/> 机上やロッカー等整理整頓や持ち物の管理することが難しい
	<input type="checkbox"/> 教室の場所を覚えられない、校内で迷う
	<input type="checkbox"/> 身だしなみを整えることが難しい

イ 個人情報の配慮

個人情報の取り扱い、個人情報保護条例、情報セキュリティポリシーに従い、電子データについてはシートに個人情報を記載せずに取り扱うこととした。また、シートにはパスワードをかけ、暗号化をした上で取り扱う。高校より事前情報が記入されたシートを電子データで受け取った時には、特別支援学校が印刷して、巡回相談に持参し、電子データは削除する。電子データでのシートのやり取りは事前情報のみとし、その後は紙媒体でやり取りをする。

記入を終えたシートは原本を高校、コピーを1部特別支援学校で保管し、今後の連携にむけて情報を共有する。

ウ ケース会議での活用

ケース会議では参加する教職員に①～③まで記入してあるシートを配付し、会議終了後には回収する。シートを資料として活用することで担任の生徒の捉えや特別支援学校の見立てを見える化する。

5 A高校での実践

A高校は高COが窓口となり、特COと連絡を取り合った。巡回相談前日までに事前情報(①②)のやり取りを行う予定だったが、実際は巡回相談の授業観察当日に手渡しでシートを受け取った。授業観察後に情報の聞き取りを行った。なお日程調整の関係で授業観察とケース会議は別日で実施した。3事例の実践を行ったが、今回は2事例を取り上げて説明をする。

(1) 対象生徒C

第5表 対象生徒Cのシート(一部抜粋)

要支援だと思われる項目：行動
相談したいこと：行動
担任がチェックをつけた項目：
机上やロッカー等整理整頓や持ち物の管理することが難しい
結果を思慮せずに行動に移すことが多い
B 特別支援学校がチェックをつけた項目：
全体指導での指示理解が難しい
板書内容をノートに書き写すことが難しい
課題等を期限通りに提出できない
B 特別支援学校(特CO)の見立て：
①提出物の管理、荷物の整理が苦手→見通しやイメージの持ちづらさ
②高度な口頭指示、内容理解が難しいところがある 等
支援策：進路実現に向けた自己理解
・できることとできないことを言語化し、整理する

事前情報から特COは、生徒Cには不注意な傾向があるのではないかと予測した。しかし、授業観察で見られた様子は、「授業後に使用した教科書類を全てリュックにしまっただけのもの、日課表を見て必要な物を取り出している」姿であり、そこから「本人なりに工夫している」という見立てをした。そこで担任に情報の聞き取りをすると、気になっていることは「いつもリュックがパンパンである」「教科書類をいつも持ち歩いている」ことであり、担任と特COの気になる項目に違いはあったが、生徒なりの工夫であることを互いに理解した。

ケース会議の中で、支援策は「進路実現に向けた自己理解」となり、具体的な支援策の意見が出され、特COがシートに記入することで、記録として残すことができた。

(2) 対象生徒D

第6表 対象生徒Dのシート(一部抜粋)

要支援だと思われる項目：集団参加、対人関係・社会性、コミュニケーション、行動
相談したいこと：対人関係
担任がチェックをつけた項目：
時間割や教室等の急な変更に対応できない
些細なこと、1つのことにこだわり、他のことが考えられない
相手との距離感が取れない
冗談や皮肉が通じず、言葉通りに受け取る
友人が極端に少なく、一人でいることが多い
B 特別支援学校(特CO)の見立て：
①対人関係の困難さ→どうすればいいのかを具体的に(視覚的に)伝える必要がある
②経験したことが行動にあらわれている 等
支援策：対人関係の構築
・他者に対するアプローチの引き出しを増やす

事前情報より特COは、生徒Dには対人関係に特性があるのではないかと予測した。チェックされた項目の様子は、授業観察でも見られた。また、授業中のプリント回収時に教員が、「後ろからプリントを前に回す」

と指示を出したところ、生徒Dだけは席を立って一人ひとりのプリントを回収の様子が見られた。そこで特C Oは、シートにその様子と、指示された内容よりも自分のやり方を通すこだわりではないかを見立てを記入した。ケース会議で、特C Oの見立てを見える化したシートを見て、高校の教職員から、「その行動には、生徒Dが気になっている友人に近づきたいという意図があったと思う」という意見があった。数時間しか観察できない特C Oでは、気付けない視点を共有することができ、生徒の理解につながる場面が見られた。高校と特別支援学校のそれぞれの見立てをすり合わせていくことで、生徒を多面的に捉えることができ、その後は、特性のこだわりと対人関係の二方向から支援を考える機会になった。

6 調査2

(1) シートの有効性

今回シートを活用して有効だった点として「校内で支援の必要な生徒に関わる教職員間で情報共有ができた」「ケース会議の進行がスムーズだった」「生徒についての理解が深まった」に半数以上の回答が得られた。生徒支援に関わる利点だけでなく、ケース会議の進行がスムーズになることでケース会議の所要時間も短くすることができ、これは教職員の負担軽減につながると言える。

聞き取り調査においては、シートを記入した担任から「1、2学期の関わりを振り返ることができた」「気になっている点の具体的な部分の意識がなかったので、チェックがあることで整理された」「チェックリストを記入する時に、教科担当の先生方に話を聞きながら、チェックをしたので、生徒の情報を得たり、整理したりすることができた」という話があった。事前情報の記入は、記入者にとって生徒の情報を整理しやすい点、また校内において生徒の情報を共有するきっかけになった点において有効であったと考える。

校内での活用で中心となる高C Oからは、「シートを共有する方法には課題があるが、情報共有ツールとして活用することが可能になると思う」という話を聞くことができた。

特C Oにとっての利点は、「高校の巡回相談では座学のみでの授業観察だけでは見立てることが難しい場合があり、生徒についての情報収集が欠かせない」、「(事前情報で)高校側の生徒の捉えが分かったり、生徒を観察する視点を整理したりすることができた」ということだった。また「シートを記入した担任の『生徒にどうなってほしいか』という思いを明確にすることで、ケース会議での見立ての伝え方にいかせるのではないか」という話を聞くことができた。

また、この他の1事例についても同様の評価が得られた。

調査2で得られた、シートの有効性について第7表に示し、改善点については第8表に示した。

第7表 シートの有効だと考えられる点

<p>【事前情報】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(高) 記入者にとって生徒の情報を整理しやすい ・(高) 生徒の情報を共有するきっかけとなる ・(高) 支援が必要だと思われる生徒を考える時に参考になる ・(高) センターの機能の活用にあたり、対象になる生徒がわかる ・(特) 高校がどのように生徒を捉えているかがわかる ・(特) 生徒を観察する視点を整理しやすい <p>【情報の聞き取り】【巡回相談の実施】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(高特) 互いの視点を知ることができる <p>【ケース会議の実施】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(高) ケース会議の進行がスムーズになる ・(高) ケース会議において生徒の情報を共有しやすい ・(高特) 生徒を多面的に捉えることができる <p>【校内の活用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(高) 校内で情報共有ツールとして活用できる可能性がある ・(高) 支援方法を教職員間で共通理解にいかす
--

第8表 シートの改善点

<ul style="list-style-type: none"> ・(高) チェックリストにあてはまらない生徒のための自由記入欄があるとよい ・(特) 高校のニーズの明確化、生徒にどうなってほしいのかがわかるとよい ・(特) ケース会議中の記録を特別支援学校が行い、ケース会議で決まった支援策の記入を高校が担当するという役割に変更をすると、シートのやり取りがスムーズになるのではないかと
--

(2) センターの機能の活用

「対象生徒についての捉えに変化があったか」の質問には半数以上が「あった」と回答した。自由記述の中には「特別支援学校の先生の意見を聞き、いつもとは違う視点でその生徒を見ることができた」という意見があった。また「センターの機能をまた活用したいか」には半数以上が肯定的な回答をし、巡回相談は高校においても有効であることが明らかとなった。「定期的な連携があると相談しやすい」「気軽に相談できるとよい」という意見も聞かれ、顔の見える関係づくりを特別支援学校から意図的に設定していくことが今後必要であると考えられる。

研究のまとめ

1 シート活用の成果と課題

(1) 高校における成果と課題

高校においてシートの活用は、多面的な生徒理解や教職員間での情報共有において有効であることが分かった。特別支援学校の見立てや対象生徒の他教科の様子が記入されているシートが手元にあること、ケース会議で特C Oがエピソードを交えて伝えることで、高校の教職員間の情報の共有や生徒の理解を深める一助となったと言える。

さらに、シートを情報共有のツールとして活用し、チームで生徒を支援するきっかけや、支援の引き継ぎに使う等、必要な支援が継続できるよう支援体制を整えることが望まれる。

(2) 特別支援学校における成果と課題

特別支援学校にとってもシートは高校の視点を知るという点で有効であった。シートがあることで生徒に

ついでに情報が集約され、見立てる際に高校との視点の違いを意識でき、高校が気になっている生徒の課題を重点的に観察することができた。ただ、思春期に起こりうる様々な心の変化を踏まえての生徒の見立てや高校の教職員への生徒の見立ての伝え方にはまだ課題が残る。

巡回相談後には特別支援学校から、高校にその後の支援の状況を聞き取り、連携の効果の振り返りをするとともに、生徒を直接的に支援する教職員を支え、共に生徒を支える立場として継続した連携が必要と考える。

(3) 高校連携における成果と課題

今回の3事例の巡回相談において、生徒の情報を共有するシートは有効であった。シートの活用は、高校と特別支援学校の双方にとって、互いの生徒を捉える観点を知り、生徒理解を深めることにつながった。高校と特別支援学校では、支援策を検討するにあたり視点の違いはある。しかし、互いの視点をすり合わせながら、生徒を多面的に捉え、生徒の見立てを一致させる過程から生徒の支援が見えた。

今後は様々な高校において実践や検証を進め、シートをより活用しやすく改訂していく必要がある。

2 今後の展望

センター的機能の認知度の低さや活用状況の少ない現状を考えると、特別支援学校は「依頼を待つ」のではなく、「積極的な働きかけ」が必要であろう。本研究では、働きかけの一つとしてシートを作成し、巡回相談で活用した。シートのチェックリストは、高校内で行われている気になる生徒について教職員で話し合う場においても、生徒についての情報を整理でき、さらなる生徒理解に活用できる。シートの活用が進むと、生徒の困りを把握し、支援を検討する中で、連携先の一つとして特別支援学校のセンター的機能の活用につながると思う。

今回の実践の中で、「教職員間で対象生徒について意識をする機会をつくることができよかった」という意見があった。多忙な中でも、意図的に一人の生徒について話をする場を設けることは、生徒の理解や支援につながるだけでなく、「生徒を知ろう」「支援を試してみよう」という教職員のさらなるエンパワメントにつながるのではないかと考える。さらに、センター的機能を活用したいと感じている教職員が多いことから、気軽に相談できる環境(例として、定期的な巡回相談)が整うと、センター的機能の活用が促進されると考える。

また、特別支援学校は、県立学校教育相談コーディネーター地区会議への参加や高校見学をする中で、高COをはじめとする高校との顔の見える関係づくりが、連携する上での基盤作りとしてかせない。各高校の

もつ実態や特色を知り、どういった支援ができるのかを明らかにし、高校が特別支援学校に求める役割を見出すことが必要であろう。

生徒へのよりよい支援に向けて、高校と特別支援学校が、それぞれの持つ専門性をいかし、対等な立場で話し合いを積み重ねながら、連携に取り組む中で、高校での支援体制がより充実することが期待される。COを中心に、より良い関係を育み、特別支援学校がセンター的機能を果たすことで、生徒への支援の充実、インクルーシブ教育の推進を目指していきたい。

おわりに

本研究が、高校と特別支援学校の連携により、互いの学校の支援する力が向上し、チームとして共に生徒を支えていくための一助となることを期待する。

最後にご多忙の中、研究に協力していただいたA高校の校長、高COをはじめとする教職員の皆様、B特別支援学校の特COの皆様深く感謝申し上げます。

引用文献

- 中央教育審議会 2005 「特別支援教育を推進するための生徒の在り方について(答申)」 p. 10
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo0/toushin/05120801.htm (令和2年1月29日取得)
- 神奈川県教育委員会 2019 「特別支援教育のあり方に関する検討会 中間まとめ」 p. 9
http://www.pref.kanagawa.jp/docs/hk2/cnt/arikatatyukan/arikata_tyukan.html (令和2年1月29日取得)
- 神奈川県教育委員会 2019 「令和元年度特別支援学校センター推進協議会第1回全体協議会」
- 神奈川県教育委員会 2017 「県立高校改革基本計画」 p. 28

参考文献

- 文部科学省 2012 「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
- 神奈川県教育委員会 2019 「かながわ教育ビジョン」 p. 48
- 神奈川県教育委員会 2018 「県立高校改革実施計画(Ⅱ期)」 p. 14
- 神奈川県教育委員会 2018 「平成30年度 特別支援学校地域センター推進協議会報告書」
- 神奈川県教育委員会 2017 「平成29年度 特別支援学校地域センター推進協議会報告書」
- 神奈川県立茅ヶ崎高等学校 2018 「平成30年度インクルーシブ教育への取り組み」 p. 15